

## ルカ 23:1-49

23:1 (そのとき、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちは) 立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。

23:2 そして、イエスをこう訴え始めた。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました。」

23:3 そこで、ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになった。

23:4 ピラトは祭司長たちと群衆に、「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と言った。

23:5 しかし彼らは、「この男は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と言い張った。

23:6 これを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ね、

23:7 ヘロデの支配下にあることを知ると、イエスをヘロデのもとに送った。ヘロデも当時、エルサレムに滞在していたのである。

23:8 彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのは、イエスのうわさを聞いて、ずっと以前から会いたいと思っていたし、イエスが何かしるしを行うのを見たいと望んでいたからである。

23:9 それで、いろいろと尋問したが、イエスは何もお答えにならなかった。

23:10 祭司長たちと律法学者たちはそこにおいて、イエスを激しく訴えた。

23:11 ヘロデも自分の兵士たちと一緒にイエスをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せてピラトに送り返した。

23:12 この日、ヘロデとピラトは仲がよくなった。それまでは互いに敵対していたのである。

23:13 ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、

23:14 言った。「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。

23:15 ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。

23:16 だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」

十

23:18 しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。

23:19 このバラバは、都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである。

23:20 ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけた。

23:21 しかし人々は、「十字架につけろ、十字架につけろ」と

叫び続けた。

23:22 ピラトは三度目に言った。「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」

23:23 ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。

23:24 そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決定を下した。

23:25 そして、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どおりに釈放し、イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた。

23:26 人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。

23:27 民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。

23:28 イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。

23:29 人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』という日が来る。

23:30 そのとき、人々は山に向かっては、／『我々の上に崩れ落ちてくれ』と言ひ、／丘に向かっては、／『我々を覆ってくれ』と言ひ始める。

23:31 『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」

23:32 ほかに、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。

23:33 「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。

23:34 「そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」」人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。

23:35 民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」

23:36 兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、

23:37 言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」

23:38 イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

23:39 十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」

23:40 すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐

れないのか、同じ刑罰を受けているのに。

23:41 我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」

23:42 そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。

23:43 するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

23:44 既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。

23:45 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。

23:46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。

23:47 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。

23:48 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。

23:49 イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。

-----

きょうは「救いについて」を二つの側面から（キリスト・メシアの面、人間イエスの面から）の話をします。

39 節から 43 節にかけて、イエスと二人の囚人のやりとりが記録されています。マタイ、マルコの二福音の平行箇所では死刑囚の二人は両人ともものしりますが、ルカではののしったのは一人で、もう一人は一人をたしなめたあとイエスに懇願します。そして、イエスはこういいます。「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」

<メシア=イエスの救いとは>

- ①十字架から降りるメシア
- ②十字架から降りないメシア

「十字架から降りるメシア」は自分自身を救います。「降りないメシア」囚人の一人とともに楽園にいるイエス、つまりは我々を救う、救ったメシアとなります。

逆説ですが、降りてしまうと自分だけしか救えない、降りないことで自分自身と我々（みんな）を救うことになります。

<人間=イエスの救いとは>

イエスは、人を救ってきたのだから自分を救え、とあざ笑われます。これは民、学者たちが自分を救えるのなら、信じよう、できないなら信じないといっているのです。

これは占い師に対して文句をいっていることと同じレベルです。占い師はこれこれこうしたら金持ちになれると占いをたてます。それに対して、占い師さん、あなた自分でやってみなよ、金持

ちになるんだろ、そうしたら俺もお前を信じるよとっていることと同じレベルです。

このような問いに対してイエスは答えない。こんな通俗的な批判に答えるのは簡単です。おまえは人間性を知らないのだ、人間がわかっていない。人間は他人を救うと同じ次元で自分を救うようにはできていない。みじめであったり、みすぼらしいのは人間としてたいして重要ではない。

人間に対する深い理解をもつイエスはこのようなことはとうぜん知っています。

では人間イエスの救いはどこにあるのでしょうか。自分自身を信じきれるかということを考えて見ます。

はたしてひとは、自分を信じきることができるでしょうか。

肉体を信じるように自分の精神とところを信じることができるでしょうか。

肉体を信じる場合、ここまで鍛えてきたのだから、ここまではできるとイメージすることはできます。100パーセントの力をだすという場合です。また120パーセントの力が要求される時もあるかもしれない、そしてその20パーセントの上乗せも時としてできることもあるでしょう。肉体を信じるならばそういうことはあるかもしれない。

ルカは最後の言葉として「父よ、私の霊をあなたの手にかかせ

ます」と記録しています。また続いてユダヤ人ではない百人隊長がイエスを「本当に、この人は正しい人だった」といい、見物客も「胸を打ちながら帰って行った」と記録しました。一方、イエスを知っていたすべて人たちは「遠くに立って、これらのことを見ていた」と記しています。

肉体＝からだ、と同じようにこころを信じること、自分自身のすべてを信じることはできるのでしょうか。

ルカの福音書ではイエスは自分自身を信じ切って十字架にかかったことが書かれています。

### <十字架の言葉>

古くから四つの福音書に記されたイエスの十字架上の七つの言葉として信仰されています。イエスの最後の言葉を聞いてきょうの終わりにします。（辞書的な解説も添えます）

### <第一の言葉> ルカ 23 章 34 節

「父よ、彼らを赦して下さい。なぜなら、彼らは何をしているのかわからないからです。」

午前9時に十字架につけられた時の言葉である。このイエスの祈りは、有力な写本BやDにはない。故に新共同訳聖書では真正性を疑われるものとして、カッコ書きされている。しかし、ステパノの殉教の記事は本節を前提にしていること、ルカの神学とキリストの精神に調和していることから、伝統的解釈では、真正性を認めてい

る。

<第二の言葉> ルカ 23 章 43 節

「アーメン、あなたに言います。あなたは今日私と共にパラダイスにいます」

<第三の言葉> ヨハネ 19 章 26 節-27 節

「ギユナイ（婦人よ）、そこにあなたの子がいます」「そこに、あなたの母が」

母マリヤと弟子のヨハネに言った言葉で、ヨハネにマリヤを支えることを依頼したもの。これにより、ヨハネがマリヤを引き取ることになった。イエスの言葉を聞いた、その時点から、ヨハネはイエスの本意を理解して、マリヤをつれて十字架のそばを離れて、エルサレムの自分の家につれていったと思われる。

<第四の言葉> マルコ 15 章 34 節 マタイ 27 章 24 節

「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ（わが神、わが神、どうして私を見捨てられたのですか。）」

「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」

三時時頃にキリストが大声で語った。大声と言うのは全地に響き渡っていくという意味がある。詩篇 22 篇と関連のある言葉である。神への呼びかけは、マルコではアラム語の「エロイ」、マタイではヘブル語の「エリ」である。周囲の人々がエリヤを呼んでいると誤解したので、マタイの記述が一番近いと思われる。多くの解釈では、詩篇 22 篇からの引用であるとしているが、より少数の解釈では、詩篇 22 篇からの引用ではなく、神がイエスを見捨てた事を指しているとしている。伝統的にはイエスが事実上、罪人の身代わりに

なって罪の裁きを受けたことを表す叫びと解釈される。イエスが神を「父」とは呼んでおらず、審判される側に立ち、自己を罪人と完全に一つにして、神の裁きを受けているとされている。

#### <第五の言葉> ヨハネ 19 章 28 節

「私は渴いている（ディフォー）」

イエスは聖書が成就するために、この言葉を発した。これは、詩篇 69 篇 21 節もしくは詩篇 42 篇 2 節の成就であると考えられている。この言葉を兵士は、肉体的な渇きであると理解して、酸いぶどう酒を持ってきた。

#### <第六の言葉> ヨハネ 19 章 30 節

「終わった(テテレスタイ)」

兵士達が差し出した酸いぶどう酒を受けた直後に、この言葉を語った。これは、旧約聖書の預言をすべて成就して、贖罪の業を完成したという意味である。

#### <第七の言葉> ルカの福音書 23 章 46 節

「父よ、私の霊をあなたの手にかかれます」

三時時頃にキリストが大声で語った臨終の言葉、マタイ・マルコでは第四の言葉にあたる。ルカではこのように表現されている。